

クラス会の幹事を任された中村は、久しぶりに高校時代の友人に電話を入れた。

「はい、山本です」

「夜分遅く恐れ入ります。中村と申しますが直也さんをお願いします」

「直也は昨日からクラブの合宿に行ってます、今日は帰って来ないんです。帰って来るのは木曜日の夜になるんですけど、何か急用ですか？」

「実は僕、直也さんの中学校時代のクラスメイトなんですけど、来月クラス会を開くことになりました、その連絡なんです」

「そうですね。では木曜日、直也が戻りましたらすぐ連絡させるようにしますね。すみませんが、お名前をもう一度お願いします」

「中村洋一と申します」

「中村洋一さんですね。お家の方へお電話させればいいですか？」

「はい、お願いします。もし家にいない場合は、携帯電話の方にかけてもらえるように言ってもらえますか？ 一応番号を言っておきます。〇九〇―四六二二―七一―二一です」

「〇九〇―四六二二―七一―二一ですね。わかりました」

「よろしく願います。失礼します」

数日後、中村の家に山本から連絡が入った。

「はい、中村です」

「夜分遅くすみません。山本と申しますが、洋一さんいらっしゃいますか？」

「もしもし山本か、久しぶり」

「本当、久しぶりだな。この間、連絡くれたそうだけどクラス会やるんだって？」

「そうなんだ。来月十二日の日曜日に横浜でやることになったんだけど、山本は出席できるかな？」

「時間は何時から？」

「四時からなんですけど」

「四時から横浜か・・・あにくその日は部活の試合があるんだ。夕方には終わる予定なんですけど、それから横浜まで行っても、ちよつと四時には間に合いそうにないな」

「三浦や吉田も一時間遅れて来るって言うてるし、途中からでも出席できないか？ 西山先生もその日来ることになってるし、結構人数も集まりそうなんだ」

「そうだなあ、それじゃ早く終わったら顔を出すようにしようかな。一応、店の名前と場所を教えてよ」

「住所は横浜市西区南幸二―二十一―七、松乃屋っていう日本料理屋なんだ。電話番号は〇四五―二四二―七七―一、大通り沿いにあるから場所はすぐにわかると思うよ」

「わかった、ありがとう」

「それじゃ、当日楽しみにしてるよ」

中村はそう言って電話を切り、まだ出欠のはっきりしない何人かに再度、確認の電話を入れた。